

【目次】

- ・臨死体験－歴史[2ページ目]
- ・臨死体験のコアとなる部分[4ページ目]
- ・中間生記憶の共通パターン.....[5ページ目]
- ・臨死体験、中間生記憶の共通パターンから考察する「世界の真理」.....[6ページ目]
- ・宗教や神話を比較した考察.....[7ページ目]

【臨死体験－歴史】

●臨死共有体験

＞7世紀に迦才が臨死体験の収集書である「浄土論」を編集している。そこに収録された20例のうち1例は臨死共有体験であり、臨終者の側にいた全ての者が神仏の姿を見た、と記されている。

●伝統宗教との比較

～シャーマニズムとの関連～

＞人類学者ナンディスワラ・テーロは、アボリジニ文化の「ドリームタイム(夢時間)」という概念が、臨死体験に類似していると指摘している。それは人の精神が死後に赴く場所であり、時間も空間もなく、そこを訪れた者は無限の知識に触れることが出来るという。

＞ドイツの民族心理学者ホルガー・カルヴァイトによれば、アボリジニのみならず、世界中のシャーマンの文化の殆どすべてに、広大な超次元領域の描写があるという。そこには、人生の回想、教え導く役割を果たす教師的存在、想念によって現れる物質、美しい光景、などについての言及があり、そうした領域に旅する能力が、シャーマンになるための必要条件である。シベリアのヤクート人、南米のグアジロ・インディオ、ズールー人、ケニアのキクユ族、韓国のムーダン(巫俗)、インドネシアのメタワイ島に住む人々、カリブー・エスキモーなどの文化には、生命を脅かす病に倒れ、死後の世界を訪れたのちに、シャーマンになったという人々の言い伝えが残っているとされる。

～大乘仏教との関連～

＞中国浄土教の僧善導は、死にゆく者がヴィジョンを見たらその様子を書き取るように、と他の僧に指示していた。こうした指示は少なくとも日本の鎌倉時代までは、仏教の1つの手本だった。実際にこうした時代の臨死体験の記述の多くは、浄土思想の資料の一部として保存されている。

＞平安末期の浄土宗僧侶である源信の『往生要集』には、臨終の際に眩しく輝く光の仏阿弥陀如来を心に念じれば、阿弥陀如来が死にゆく者を迎えに来る、と記されている。『無量寿経』や『阿弥陀経』には、空間的に無限であり、限りない光に照らされ、個人の想念が叶う世界として浄土が描かれている。カール・ベッカーは臨死体験で出現するトンネルは、浄土の「蓮の茎」に相当するのではないかと述べている。

～チベット仏教との関連～

＞チベット仏教における『チベットの死者の書』では、人が死から再生までの間に留まる霊的な次元が描かれている。「バルド・トドル」(中有・中陰)と呼ばれるその世界では、

死者はまず目も眩む程の光明に出会い、それに勇気をもって飛び込めば解脱するとされる。バルド・トドゥルでは自分自身の意識の投影が、様々な神の姿を取って現れるという。

●記録の歴史

＞臨死体験を記述していると思われる歴史的な文献については、『チベットの死者の書』、エジプトの『死者の書』、プラトンによる『国家論』、ベーダによる『英国の教会と人々の歴史』などが挙げられる。

＞歴史家であるフィリップ・アリエスによれば、西暦 1000 年以前の人々は、死に瀕した時に、神の幻を見たことやすでに亡くなっている人々と会ったことを普通に語っていたという。また、ハーバードで宗教学の講義を務めるキャロル・ザレスキーは、中世の文献は臨死体験の記述であふれていると指摘している。15 世紀のオランダの画家ヒエロニムス・ボスの「天上界への上昇」という作品には、天使に付き添われながら光のトンネルに入っていく人々の姿が描かれている。

＞日本では『日本霊異記』『今昔物語』『宇治拾遺物語』『扶桑略記』『日本往生極楽記』などに臨死体験そっくりの記述がある。柳田国男の「遠野物語」には臨死体験の話が豊富に含まれている。

引用：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%AD%BB%E4%BD%93%E9%A8%93>

【臨死体験のコアとなる部分】

1

暗いトンネルを通過して出口に明るい光を見る
光のトンネルに入っていく

2

神秘的あるいは強烈な光に遭遇する
美しい光景
限りない光に照らされている
目も眩む程の光明に出会う
神の幻を見る
無条件の愛に包まれ、宇宙と深く結びついていると感じる
心の安らぎ、とてつもない恍惚感

3

時間、空間が無い
空間的に無限

4

教え導く役割を果たす教師的存在
亡くなっている人々と会う
死後の世界の人々との意識交信

5

人生の回想
ライフ・レビュー

6

想念によって現れる物質
個人の想念が叶う世界
自分自身の意識の投影が、様々な神の姿を取って現れる

7

無限の知識に触れられる
無限の知識に触れ、未来が示される

死後の世界の階層を見る、死後の世界との境目を見る
目も眩む程の光明に出会い、それに勇気をもって飛び込めば解脱する

参考

<https://karapaia.com/archives/52137088.html>

https://tocana.jp/2020/10/post_173095_entry.html

<https://onlylife.jp/blog/1/1-1/1-1-3/1-1-3-4/>

<http://osoushiki-plaza.com/anoyo/takai/takai1.html>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%AD%BB%E4%BD%93%E9%A8%93>

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%99%E3%83%83%E3%83%88%E6%AD%B%E8%80%85%E3%81%AE%E6%9B%B8>

【中間生記憶の共通パターン】

- ・光輝く球体
- ・まだ生まれてない魂がたくさんいる
- ・神様がいる
- ・心の絵でコミュニケーションをする
- ・産まれる様々な条件や乗り越えるべき課題、使命を決める
- ・井戸、テレビ、鏡を通して母親を見る
- ・自分で「母親」を選ぶ
- ・兄弟、姉妹になる予定の魂と出会い、生まれる順番を神様と決める
- ・滑り台、エレベーターに乗って母親の胎内に来る

参考

<https://sendai-akamon.ac.jp/column/2285>

[https://inochi-](https://inochi-kataribe.com/2019/11/28/%E4%B8%AD%E9%96%93%E7%94%9F%E8%A8%98%E6%86%B6/)

[kataribe.com/2019/11/28/%E4%B8%AD%E9%96%93%E7%94%9F%E8%A8%98%E6%86%B6/](https://inochi-kataribe.com/2019/11/28/%E4%B8%AD%E9%96%93%E7%94%9F%E8%A8%98%E6%86%B6/)

http://elib.bliss.chubu.ac.jp/webopac/bdyview.do?bodyid=XC19000022&elmid=Body&fname=C03_001_058.pdf

<https://photogenic-kids.net/tainaikioku2017818>

https://www.news-postseven.com/archives/20141124_288383.html?DETAIL

【臨死体験、中間生記憶の共通パターンから考察する「世界の真理」】

臨死体験や中間生記憶には共通するパターンがあり、文化や地域を越えた普遍性がある。

この共通パターンの普遍性が非常に興味深いと共に、真理がそこにあるような気がする。

神秘体験そのものには時代を越えた共通性があるが、その体験をどう解釈するかの違いが宗教や哲学の違いを生んでいるのだろうと思われる。

この共通パターンから推察される人生の意義について私なりの考察をしていきたいと思う。

～考察～

魂の世界は、自分自身の想念によってその見え方が変わる世界であり、自分自身の想念が「天国」「地獄」を決めると思われる。

教え導く役割を果たす教師的存在がおり、死後に人生の回想を行った後、生まれ変わる際に乗り越えるべき課題・使命を決めた上で、自分で母親を決めて生まれ変わる。

つまり、生まれ変わる理由は、自分自身の持つ「想念」を向上させることであろうと思われる。

神という存在は、無条件の愛という深い結びつきを持った存在であり、
想念を向上させるということは、想念を神に近づけることであり、
その深い結びつきが神との一体感を生むと思われる。
つまり、これが解脱であり、涅槃に入るということである。

宇宙はなぜ誕生したのかについても、「想念」がヒントになると思われる。
つまり、“今存在するこの宇宙という存在”を望む魂の想念が宇宙を生み、この宇宙に存在したいと望む想念を持った魂がこの宇宙に生まれ変わると思われる。

また、究極的には意識は一つであり、魂は一つである。
教え導く役割を果たす教師的存在や、他の魂の存在は全て、「想念」が創り出した存在である。

つまり、教師的存在を望む想念が教師的存在を創り、他の魂を望む想念が他の魂を創る。

自己と他者という存在は、その存在を望む想念が創り出しているのである。

【宗教や神話を比較した考察】

ゾロアスター教

- ・感謝の儀式
- ・森羅万象に宿る善のために働く精霊
- ・善悪二元論
- ・最後の審判
- ・天国と地獄
- ・善思・善語・善行の3つの徳(三徳)の実践

マンダ教

- ・流水による洗礼、信仰儀礼の遵守による光の世界の帰還
- ・死後、神アバトゥルの審判を受け、認められると光の世界に帰還できる

マニ教

- ・ゾロアスター教・キリスト教・仏教などの流れを汲んだ混合宗教

古代ギリシアの宗教

- ・死者の魂は冥界に行く
- ・ヒュブリス(傲慢)は罪
- ・節度を重んじる

オルペウス教

- ・魂と肉体の二元論、転生、輪廻からの最終解脱
- ・禁欲的道德律

ユダヤ教

- ・律法
- ・最後の審判

キリスト教

- ・アガペー、無償の愛
- ・最後の審判

イスラム教

- ・六信五行 or 五信十行
- ・喜捨
- ・最後の審判

ヒンドゥー教

- ・カースト
- ・業(カルマ)
- ・輪廻(サンサーラ)
- ・解脱

ジャイナ教

- ・相対論
- ・三宝の重視と五禁戒
- ・解脱

シク教

- ・世俗の職業に就いてそれに真摯に励むことを重んじる
- ・輪廻転生による再生を繰り返した末に、神と合一する

仏教

- ・業(カルマ)、因果
- ・輪廻転生からの解脱、涅槃
- ・縁起
- ・空
- ・三宝、三学、三法印
- ・四諦、中道

～実践面～

善思・善語・善行

無償の愛

喜捨

節度、禁欲

律法

三宝、三学、三法印、四諦

業(カルマ)

～天国・神の概念～

最後の審判

神アバトゥルの審判

輪廻転生からの解脱、涅槃

輪廻転生からの神との合一

～考察～

各宗教の主な特徴を挙げると、共通性が見えてくる。

実践面における共通性は、「良い行いをすること」と「節度を守ること」である。

天国・神の概念における共通性は、大きく分けて「神の審判により天国か地獄か決まる」思想と、「輪廻転生からの解脱または神との合一」という2つの思想である。

輪廻転生思想においては、輪廻転生そのものを地獄と定義しているため、2つの思想は似た思想であるとも言える。

つまり、あらゆる宗教の根本における共通性は「良い行いをすれば天国に行ける」という思想である。

『臨死体験、中間生記憶の共通パターンから考察する「世界の真理」』において考察した世界の真理は、
実はすでにあらゆる宗教の中に含まれていたと言える。

多くの人が受け入れている宗教、特に世界宗教と呼ばれている宗教にはすでに真理が含まれており、
それらの宗教の「根本的に何を伝えたいのか」を理解した上で、素直に信仰すれば良い話だったのである。

だが、人間は自身の持つ煩惱ゆえに、宗教間の対立や懐疑思想を生み出し、その中で歴史を歩んできた。

実は真理は、まだ未解明なものではなく、すでに「すぐ傍に」あるものであり、
我々人間は、煩惱によりそのことに気付いていないだけなのかもしれない。

我々人間は、すでに真理を解明していたと言える。

神話の元型

●文化英雄

火や作物の栽培法などの有意義な発明や発見をもたらし、人間世界の文化に寄与したとされる伝説的人物やある種の動物

既存の世界の上で特定の文化要素の創造を行う存在

文化英雄の中には、いたずらを行う異界の存在であるトリックスターである例も見られる

●死神

生命の死を司るとされる神で世界各地に類似の伝説が存在する。冥府においては魂の管理者とされる

殆どの場合死神は宗教の中で最も重要な神の 1 つとされ、最高神もしくは次いで位の高い神となっている場合が多く、崇拝の対象にしている宗教もある

この場合、単に死神崇拝といっても「絶対的な力を持つ神」の能力の一部に「生死を操る能力」がある

●地母神

多産、肥沃、豊穡をもたらす神で、大地の豊かなる体現である。「大地の母」として描かれる

●ヒーロー

英雄、勇士、華々しく活躍した人、敬慕される人物

●死と再生の神

生きている神的存在が一度死に、死者の存在する地下世界に行った後で再生するという説話は、世界中に広く分布している

●天空神

直接ないし間接的に宇宙を創造した天上の至高存在者として、世界中の神話に普遍的に見られる神格

多くの場合、天空神は宇宙の創造以外には積極的な役割を果たさない

天上の至高存在者という概念が普遍的に存在することから、天空神への信仰は極めて古い起源を持つと考えられる。アニミズムやトーテミズムが宗教生活を支配している社会においても、やはり至高の天空神への信仰は存在している

●太陽神

古代より世界各地で太陽は崇められ、崇拝と伝承は信仰を形成した

●トリックスター

神や自然界の秩序を破り、物語を展開する者である

善と悪、破壊と生産、賢者と愚者など、異なる二面性を持つのが特徴である

トリックスターは、時に悪意や怒りや憎しみを持って行動したり、盗みやいたずらを行うが、最終的には良い結果になるというパターンが多い

引用:Wikipedia

神秘主義について

＞神秘主義では、何かを信じるということではなく、修行法に従ってその地図を確かめていくという経験主義的、実証的な発想が要求される。

＞神秘主義思想は宗教や哲学の奥義、つまり、一般向けの教え(公教)に対する専門少数者向けの教え(秘教)だと言える。

＞様々な宗教の公教の部分には大きな差があっても、その秘教の部分では似ていることが多い。

＞エジプトやメソポタミア(シュメール、バビロニア)、インド、ペルシャ、ゲルマン、ギリシャ、中国、日本などの神話は、その民族系統(語族)が異なるにも関わらず、とても似ている。

引用:<https://morfo.blog.ss-blog.jp/>

臨死体験との関係について

＞人類学者ナンディスワラ・テーロは、アボリジニ文化の「ドリームタイム(夢時間)」という概念が、臨死体験に類似していると指摘している。それは人の精神が死後に赴く場所であり、時間も空間もなく、そこを訪れた者は無限の知識に触れることが出来るという。

＞ドイツの民族心理学者ホルガー・カルヴァイトによれば、アボリジニのみならず、世界中のシャーマンの文化の殆どすべてに、広大な超次元領域の描写があるという。そこには、人生の回想、教え導く役割を果たす教師的存在、想念によって現れる物質、美しい光景、などについての言及があり、そうした領域に旅する能力が、シャーマンになるための必要条件である。シベリアのヤクート人、南米のグアジロ・インディオ、ズールー人、ケニアのキクユ族、韓国のムーダン(巫俗)、インドネシアのメタワイ島に住む人々、カリブー・エスキモーなどの文化には、生命を脅かす病に倒れ、死後の世界を訪れたのちに、シャーマンになったという人々の言い伝えが残っているとされる。

引用:<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%AD%BB%E4%BD%93%E9%A8%93>

つまり、ここからわかることは、
宗教における一般向けの教えや哲学というのは、「神秘体験を経験したことのない一般の人に対して、いかに言語化による説明を行えるか」という試みであると言っても良い。

真理はすでに人類は解明しており、それは神秘体験による言語化できない体験によって得られるものである。

修行を通じて神秘体験による悟りを得た者たちにとって真理は言語化できない経験として理解を得ているが、
そのような経験のない一般の人にとっては、真理を経験的に理解することは不可能である。

そこで誕生したのが、一般向けの教えとしての宗教や哲学といった言語化の試みであった。

「すでに解明されている真理」の言語化が、長年行われてきている探求の歴史だったのである。